



Title	4. 新宿区における外国にルーツのある子どもへの支援
Author(s)	小林, 普子
Citation	GLOCOLブックレット. 2012, 8, p. 60-68
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48282
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

II

取り組み事例と 課題の共有

4. 新宿区における外国にルーツのある子どもへの支援

小林普子 NPO法人「みんなのおうち」外国籍家族共生支援担当理事

小林普子 皆さんのお手元に、レジュメのほかに資料が2枚とブルーの冊子(『共に学ぶ外国にルーツを持つ子どもたち』発行:特定非営利活動法人 21世紀教育研究所)があると思います。それを参考にしていただければありがたいと思います。

はじめに、新宿区の現状、次に外国にルーツのある子どもを取り巻く状況、3番目に「子どもクラブ新宿」の支援活動から見えた問題点、4番目に新宿区の課題の解決に向けてというところで、今回は3番目の「子どもクラブ新宿」の支援活動から見えてきた問題点を強調して話させていただきたいと思っております。

新宿区の現状ですが、人口が約32万人、そのうちの3万5,000人、約11%が外国人登録になっております。区民の11%が外国人登録者で、国別に申し上げますと韓国・朝鮮が1万4,000人、約40%です。それから中国籍が1万2,000人で約34%。それ以下は、2年前までは3番目がフランスでしたが、最近はミャンマーの方が増えておりまして、1位が韓国・朝鮮、2位が中国、3番目がミャンマー、4番目がフランスとなっており、以下フィリピン、米国になっています。フランスがなぜ多いか

小林普子

1972年、大学院修士課程修了。
2004年に日本語ボランティア団体「虹の会」を設立し、2007年まで代表を務める。
2004年より新宿区子育て支援施設「ゆったり～の」運営員、
2005年よりNPO法人「みんなのおうち」外国籍家族共生支援担当理事を務め、2006年より新宿区とNPOとの協働事業「外国にルーツのある子どもの日本語と学習支援など」を実施している。

というのは、たまたま新宿区内にフランスが経営する小学校があるということで、神楽坂に多くフランス人が住んでおります。フランス人がたくさん住んでいるということですが、これから私が話す話に関して余りフランス人には関係ないということになります。

どのような年齢層かというと20代から30代が多いです。それから、在留資格は就労あるいは留学ということになっております。外国人が急激に増えたのが1980年代以降で、ニューカマーと言われている人たちです。国籍は先ほど上から順番に話しましたけれども、多いときは119カ国を超えるということです。多分、外国人集住都市と比べて新宿あるいは東京都内はいろいろな国の方がいるということで、おそらく、集住都市ですと例えば日系の方が多いと思いますが、新宿の場合はむしろ日系の方がほとんどいらっしゃらないという状況になっております。

次に外国にルーツのある子どもを取り巻く状況になりますが、私がこの活動に入りましたのが7年ほど前になります。私は新宿区に住んで30年になりますが、外国人が多いということや子どもたちの学習支援が必要だということを特に認識していたわけではありませんでした。7年ほど前に新宿では、日本語がわからなくて、子育てなかのお母さん方が子どもに予防接種を受けさせることができないという話を伝え聞きました、「えっ、そういうお母さんがいるの」ということで、何とかしなければと、ボランティアのための日本語教室というのを受けました。平成15年になります

が、全国紙にも多く載った、中学生の女の子がマンションから子どもを突き落としたという事件がありました。その突き落とした側の中学校1年の女の子が外国にルーツのある子どもであったということでかなり大きな話題になりました。秋田でありました「親子日本語教室」というものを文化庁から新宿でやつらどうかという声かけがありました。私がたまたま親子支援のための団体をつくったということもあり、衝撃的な事件があったので国も含めて新宿でやるということで、年度途中にもかかわらず、文化庁委嘱の乳幼児を連れた親子日本語教室を引き受けることになりました。

そのなかで、フィリピンから来たあるお母さんから、日本語がわからなくて学校でいじめに遭っている子どもがいて不登校になってしまっているという相談を受けました。たまたま相談を受けましたら、偶然にも私の家の近くに住んでいる子どもでした。私は日本語を教える専門家ではなかったのですが、日本語と教科を教えましょうということで、出入りをしていた児童館の片隅を借りてその子の支援をするということを始めました。

たまたまそれは個人的な立場で始めたのですが、始めてみるといろいろな人から、うちの子どもも知り合いの子どもも日本語がわからない子がいる、学校で困っている子がいるといってどんどん頼まれるようになりました。とても私一人ではできないなと思い、支援活動のために教育委員会が何とか動いてくれないかと、退職教員を使って何かできないだろ

うかと教育長に頼みに行きました。しかし「定年退職する人のことは教育委員会で一切把握しておりません、あなたがやりたかったら自分でやつたら」とけんもほろろで冷たいことを言われました。そうしたなかで、平成19年から協働事業提案制度が新宿区にでき、その制度のなかで今やっている「こどもクラブ新宿」を事業提案いたしました。たまたま運よく、本当に運よく通ることができて、現在の「こどもクラブ新宿」というのを4年前に立ち上げました。

それを立ち上げる前に、新宿区ではどういうことをしていたかと申しますと、誇らし気に、「新宿はお金は使っています。新宿区はほかの自治体に比べてすごいことをしています」と言われました。ほかの自治体からも新宿区は先進的だと言われますが、新宿区に住んで現状を知っている者としては何か考えてしまうことがあります。新宿区として、来日児童・生徒に対して教育委員会が日本語サポート指導を行っております。これは平成元年から始めており、平成15年度から業者委託という形になっておりまして、むしろ平成15年以降の業者委託のところが私としてはすごく問題かなと思っている部分があります。

日本語サポート指導の時間数は、幼稚園は40時間、小学校が50時間、中学校が60時間で、プラスアルファとして中国語と韓国語に限って教育センターと仲之小学校というところで2週間にわたって30時間受けることができます。それと、平成21年度から、放課後事業というものが初期指導が終わった子

どもたちに限って、希望者に1回2時間、週2回28週、合計56回・112時間のサポートを受けられることになっています。この2つの事業が教育委員会の事業として成り立っています。

予算的に申し上げますと、日本語サポート指導に3,500万円使っております。放課後指導に関しては2,200万円の支出をし、合わせて5,700万円の支出をしていますので、金額的にいうと、ほかの自治体の方たちからはすごくお金を使っていると言われることです。新宿区長に言わせても「新宿区は進んでいる」ということですが、日本語サポート指導のところが業者委託です。その業者委託はどんな業者かと申しますと、通訳派遣をしている会社に、変な言い方ですけれど3,500万円で丸投げしている。そのところの人材活用が問題ではないかと私は現在思っているところです。

では、私がやっております子どもの居場所としての学習支援のところを詳しく紹介させていただきます。

今、私が関わっている子どもの居場所としての学習支援では、居場所というところをかなり強調したいと思っています。居場所ができる初めて子どもが学習に取り組むことができるのではないかと思っています。この事業は、先ほど申し上げましたように区とNPOとの協働事業という形で立ち上げました。

では、どういう子どもたちを支援対象としているかと申しますと、表題にもなっておりますように、外国にルーツのある子どもという



形しております。来日児童・生徒ということになりますとかなり幅が狭まってしまいますので、外国にルーツのある子どもです。この表現もいろいろと思いますけれども、一応こういう名称にしております。というのは、日本生まれの子どもたちも支援したいという気持ちがありまして、来日児童・生徒というと日本生まれの子どもが外されてしまうこともありますので、一応こういう表題になっております。

活動している場所は、児童館を2館借りて、1カ所の児童館では午後6時45分から、もう1カ所の児童館では午後7時から2時間利用をさせてもらっております。支援対象者は小学校5年生から中学校3年生までで、1人の子どもに週2回、合計週4時間です。中学校3年生に関してはプラス土曜日に3時間あります。中3に限っては、受験を目指しておりますので週3回支援しています。現在、2つの児童館を合わせておよそ40名の子どもが通ってきております。

支援者はボランティアで、現在60人ほどの

登録があります。ボランティアに関しましては、資格を全く要求しておりません。教員の資格も一切必要ありません。ただ、基本的に伝えているのは、子どもが好きな人ということで、ボランティア登録をしていただいて、それぞれ皆さんの得意な科目を教えてもらっています。こういう言い方も変なのですけれども、大体1回、2回来て合わない人は辞めていきますので、辞めていく人の跡は追わずということで、なるべくボランティアさんが欲しいので、あまりハードルを上げておりません。少し不審な感じの人は私のほうからすみません辞めてくださいとお願いして、辞めてもらっています。辞めていただくときは結構悪態をつかれたりして嫌な気分をすることもありますが、子どものことを考えると辞めてもらったほうがよいと思う人には辞めてもらっています。

「こどもクラブ新宿」の支援活動から見えてきた問題点を6点にまとめております。

皆さんも支援をしていて多分感じていることだと思いますが、高校進学の壁があります。特に東京都は外国人に対して多分、ほかの県に比べるとかなり冷たいところです。リーダーがそういう方なので、そう言えば大体お分かりになると思います。東京都では子どもたちの家庭は経済的にかなり苦しい家庭が多いので、とても私立に行けるような経済状態ではありませんので、子どもたちには都立に行くようにという形で指導しております。東京都には都立が、正確な学校数はわからないのですけれども、在京外国人枠というものが4月入学で40名あるのみです。それも来日3年

未満の子ということで、これで受かる子はかなり学力のある子で、どちらかというとエリートの子しか受かりません。ですから、私たちがかわっている子どもたちがまずこの枠のなかで受かるということはあり得ないと考えております。

中学校の進路相談では、外国人というとみなここを受けなさいと指導するので、昨年度の倍率が4.4倍ありました。普通、東京の都立の倍率だと高くて1.8倍、2倍を超えるということはないなかで、ここの外国人枠なるところが4.4倍という現実になっております。

来日して日の浅い子どもたちに対して5教科受験、3教科受験というコースがありますが、東京の場合はほとんどが5教科受験で、あまり日本語ができるないなか、5教科で受験するのは非常に難しいことです。3教科受験というコースもありますが、そのコースも最近減ってきておりまして、やはり高校進学の壁というのが厚くなっています。

2番目に、学校との連携の問題があります。学校側は個人情報保護という理由で、なかなか学校とは連携をさせてもらえないというのが現状です。例えば、私は子どもたちの保護者でもありませんので、この子について言ったときに「あなたは保護者ではありません、個人情報は保護者以外の方とは情報交換はできません」と学校から言われてしまって、なかなか連携が難しいです。さらに、子どもたちの日本語がそれほど十分ではないので、学校でどのような生活をしているかが見えづらいということもあって、その点でも私たちとし

ては学校と連携を取りたいのですが、それも非常に難しくなっておりまます。

3番目に高校受験についての理解の問題があります。日本語があまりできない場合や、親御さんが夕方から次の朝ぐらいまで働いているケースが多く、新宿は飲食店が多いので

サービス業についてらっしゃる方が多いという事情もあります。朝、顔を合わせて子どもは学校に行ってしまう、子どもが学校から帰ってきたときには親は仕事に行ってしまうということで、ほとんど親子の会話がないというケースが多いのです。こうした事情もあり、高校

活動の概要

1. 団体名

NPO法人みんなのおうち

2. 活動地域

東京都新宿区内大久保地域と榎町地域

3. 活動概要

「外国にルーツのある子どもへの日本語と教科学習支援」を目的として「こどもクラブ新宿」という名称の教室を2館の児童館で夜間(7時ごろから9時ごろ)開催している。学習教室が第一の目的となっているが、子どもたちの居場所を目指し、抱えている問題の解決を目指している。

支援している子どもたちは来日した子どもだけではなく日本生まれの子どもたちも含んでいる。

4. 設立(活動開始)年

2006年、「こどもクラブ新宿」をNPOが事業提案をするという形態で区の協働事業として開始。

5. 活動の歴史

教室設立までは2004年から「親子日本語教室」に通ってきていた子どもを支援する中で、来日した子どもの支援を開始した。

6. 問題点

1. 学校との連携が取れない。
2. 親との連携が取れない(親の姿が感じられない)。
3. 子ども家庭支援センターと繋がってはいるが、問題の認識に差がある。
4. 行政が問題の重要性を感じていない。
5. 特に日本生まれの外国にルーツのある子どもが中学生になると自尊感情を持てなくなり虚無感に襲われている。
6. 日本語力不足のため高校進学の壁が厚い。

7. その他

多文化ソーシャルワーカーの必要性を感じる。

受験についての親御さんの理解を得ることが難しいのです。それから子どもたちも、やはり日本語力が足りないということで、学校の先生以外の人が話すことはなかなか理解できず、受験ということに対しては理解が難しいという現状があります。

4番目に、保護者の考えが見えないという問題があります。今申し上げましたように、親御さんたちはかなりの長時間労働をしております。今私の教室に40人近く子どもが来ているのですが、申し込みの際には必ず親のサインをもらうようにしています。それでも、私たちの教室に来ているということも知らない親御さんもいます。子どもに無関心というわけではないけれども、働くが得ないという状況のなかで、なかなか子どものことについてどうしてよいかわからないという状態になっております。そのため、私たちから保護者の姿が見えないので、親はこの子たちを日本でどう教育するつもりなのか理解できないことがあります。またそういう状況なので、子どもたち自身も、いつまた自分の国に帰るかも分からなかったり、あるいは自分たちは将来ずっと日本にいるのかどうかも分からないという現状です。そのため、子どもたちはかなり不安定な状態、あるいは自分の将来に対して不透明な状況下にありますので、高校進学というところに關してもなかなか気持ちが向いていかず、勉強に心が向かないケースが見受けられます。

このように、親は働くことに時間をとられていますので、高校受験についてはほとんど

認識を持っていない場合が多いです。私たちの教室に来ている中3の生徒は12月ぐらいにどこの学校を受けるかという進路相談や受験校を決定する時期になって、ようやく高校へ行くか行かないかという話になってきます。1月27日が都立高校の推薦テストだったのですが、その頃になって、「俺どうしよう」と言われ、「俺どうしようじゃなくて、もう3年前から言っているでしょう」といったやり取りをする状態です。

5番目に、行政の方向性が見えないことが挙げられます。新宿区は行政の柱に多文化共生をうたっております。区長も教育委員会も「外国にルーツのある子どもたちの教育にはすごく関心を持っており、一生懸命頑張っています」と私には言ってくれるのですが、こちらが提案することをなかなか受け入れてくれないし、話も聞いてくれないというのが現状です。そのようななかで、平成23年度には実態調査をするということになりましたので、少しは進歩したと思っています。

最後に、6番目ですが、今私が一番重要な問題と感じています。子どもたちは、いろいろな事例で、家庭環境のこと、両親のこと、あるいは子どもがどういう形で日本に来たかということを紹介してくださっておりますが、だいたい東京の場合も、国際結婚をしたりあるいは呼び寄せたり、いろいろな形で他の地域の例と同じような形で子どもたちは日本に来ていると思います。ただ1点強調したいのは、どの子も日本に来たくて来ている子がないというところがやはり大き

な問題かなと思っております。

そのようななかで、来日した子どもはされることながら、私が最近特に問題と感じ、心配になっていて、私もケースとしてかなり抱えているのが、どちらかというと日本生まれの子どもたちです。多くのケースが、お母さんの母語が日本語ではなく、文化が日本ではないという子どもたちが多いので、そのなかで育てられた子どもたちが、日本で生まれているので、生活言語というところ、あるいはコミュニケーション能力がすぐ長けております。そのため小学校のころはよいのですが、中学校に上がると語彙不足ということで、教科書が理解できないといったことや、作文が書けないという問題に突き当たるのですが、子どもたち自身はなぜ自分がそうなっているかということがよく分かりません。母子で生活し、お母さんたちが夜働いている方が多いということで、子どもたち自身が自分の出自に関して自信がなくなっています。自分は何人だろう、名前は日本名だけど何人だろうという形、あるいは両親が離婚してしまっているケースもありますので、そのあたりで子どもたちが不安定になったり不登校になったり、あるいは夜間徘徊したりという行動が見受けられます。子ども家庭支援センターとも連携をとっていますが、とても心配になっています。

最後に、新宿区の課題を解決していくはどうしたらよいかということですが、なかなか妙案が見つかりません。ただ一つ、今救われていることは、子ども家庭支援センターと連携がとれているということです。児童館で

事業をしているため、児童館の職員とは問題意識についてはかなり共有できています。これは2カ所でやっていて、1カ所は子ども家庭支援センターでしており、そのなかではソーシャルワーカーが6人ほどいますので、問題を感じている子どもたちについては私も逐次そちらに伝え、そこから調査に入ってもらうということになっています。最近ですけども、先日、1月22日にケース会議ができまして、小学校、支援センター、児童館と私と担任の先生を含めて会議をしています。こういうことを一つずつ積み上げて問題を解決していくしかないと思っています。

表1 日本語サポート指導を受けた児童生徒数

	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度
人数	75人	104人	109人	149人	134人	156人	104人

※平成21年度の減少はリーマンショックによるものと考えられます。

※数字は新宿区教育委員会から得た情報により小林が作成

表2 平成20年度21年度母語別指導対象者数

	幼稚園		小学校		中学校		計	
	20年度	21年度	20年度	21年度	20年度	21年度	20年度	21年度
中国語	4	4	29	21	28	10	59	35
ハングル	13	16	37	22	7	0	57	38
タガログ語	2	2	10	7	2	1	14	10
英語	0	2	7	8	5	2	12	12
タイ語	0	1	5	2	1	0	6	3
ミャンマー語	0	0	0	1	3	2	3	3
ポルトガル語	0	0	2	0	0	0	2	0
スペイン語	1	0	0	0	0	0	1	0
フランス語	0	0	1	0	0	0	1	0
アラビア語	0	0	1	0	0	0	1	0
モンゴル語	0	0	0	1	0	0	0	1
ベトナム語	0	0	0	0	0	1	1	1
トルコ語	0	0	0	1	0	0	0	1
計	20	25	92	63	44	16	156	104

新宿区の教育2010年度版より

表3 平成19年度外国人児童の在籍数

小学校名	外国人数	小学校名	外国人数	小学校名	外国人数	小学校名	外国人数
津久戸	3	余丁町	10	戸山	40	落合第四	2
江戸川	1	東戸山	21	戸塚第一	23	落合第五	0
市谷	0	四谷	0	戸塚第二	10	落合第六	0
愛日	9	四谷第六	6	戸塚第三	1	淀橋第四	20
早稲田	14	花園	8	落合第一	5	柏木	9
牛込仲之	36	大久保	43	落合第二	6	西新宿	2
富久	6	天神	8	落合第三	2	西戸山	14
鶴巣	1						

新宿区の教育2007年度版より

表4 平成19年度外国人生徒の在籍数

中学校名	外国人数	中学校名	外国人数	中学校名	外国人数
牛込一中	8	牛込二中	7	牛込三中	0
四谷中	13	西早稲田中	31	落合中	2
落合二中	1	西新宿中	10	新宿中	21
西戸山中	7	西戸山第二中	3		

新宿区の教育2007年度版より

表5 「こどもクラブ新宿」参加児童生徒の在籍学校 平成22年9月

学校名	平成19年	20年	21年	22年
牛込二中	1	1	0	0
落合中	2	2	0	0
落合二中	0	2	0	0
新宿中	8	9	9	8
西早稲田中	3	12	12	12
西新宿	0	3	5	3
西戸山	0	2	2	4
西戸山二中	0	2	3	4
牛込一中	0	0	0	1
牛込三中	0	0	1	0

小林が作成

参考文献

新宿区教育委員会(編)

2007 『新宿区の教育 2007年版』

2010 『新宿区の教育 2010年版』